

THE EXPONENT OF PHILIPPINE PROGRESS
SINCE 1900
MANILA BULLETIN
THE NATION'S LEADING NEWSPAPER
SPORTS BULLETIN

Paglalanun trips Arcilla for Kobe Gakuin crown

Fast-rising Rocky Paglalanun showed Davis Cupper that he has got what it takes now as he hammered out a 6-3, 3-6, 6-3 decision yesterday to rule the Kobe Gakuin Cup at the San Juanico Tennis Club courts in Ayala-Alabang Village.

Paglalanun, who came in only third in the round robin qualifying but went on to oust No. 2 Yannick Guba, 6-4, 7-5, in the semi-finals, banked on his steady baseline game to upset the national Team mainstay Arcilla in over two hours.

Arcilla, who swept all his elimination round matches, barged into the finals by tripping No.

4 qualifier Elbert Anasta, 6-1, 7-6 (4), in the semifinals.

The tournament, organized by former Davis Cupper Camoy Palahang to give his Japanese students and local netters experience in international competition, saw the participation of four other local netters — Jaime Solon, Toto Joven, Niño Alcantara and Rolando Ruel — Japanese collegiate campaigners Yugi Natsume, Akinori Yanai, Masaya Taira, So Hanatani, Hirokazu Kitao, Shinsaku Arimoto, Takero Yahiro and Koichi Akiyama.

RP netters sweep Japanese

Filipino netters overwhelmed their Japanese rivals in an exhibition dual meet featuring Japanese collegiate players in the 5th Kobe Gakuin Cup Wednesday at the San Juanico Tennis Club courts in Ayala-Alabang.

The meet was organized by former Davis Cupper Camoy Palahang to give his Japanese students and local netters some experience in international competitions, features Filipino standouts Johnny Arcilla, Rolando Ruel, Jaime Solon, Yannick

Guba, Elbert Anasta, Rocky Paglalanun, Onyok Anasta, Toto Joven and Niño Alcantara swept the Japanese team on opening day of the round-robin tournament which ends on Saturday.

Alcantara scored three wins — over Hirokazu Kitao, 6-3, 6-1; Shinsaku Arimoto, 6-0, 6-4; and Masaya Taira, 6-4, 6-4.

Similarly scoring three victories each were Ruel and Paglalanun.

Ruel topped Takero Yahiro, 6-3, 6-2; Koichi

Akiyama, 6-2, 6-0; and Arimoto, 6-1, 6-4; while Paglalanun bested Akiyama, 6-0, 6-0; Taira, 6-4, 6-4; and Yasunori Yanai, 6-1, 6-3.

Arcilla downed Sou Hanatani (6-1, 6-0) and Yanai (6-1, 6-4). Solon beat Arimoto (6-1, 6-2) and Kitao (6-1, 6-2), Guba defeated Taira (6-0, 6-1) and Yugi Natsume (6-2, 6-2). Anasta bested Natsume (6-2, 6-1) and Hanatani (6-3, 6-2) and Joven thumped Yanai (6-0, 6-1) and Akiyama (6-0, 6-1).

第4部 球技編・テニス

元国際審判

川廷尚弘さん

王者サンフランシスコ(※1)のサーブエースに対し、クライチエウ・オランダ、※2も高速サーブで対抗する。1996年、テニスの四大大会の一つ、ウィンブルドン選手権の男子シングルス準々決勝は無敵を誇ったサンフランシスコが敗れる歴史的一戦となった。

6〜7球も離れたところから、ラインにボールが1球でもかかっているかを見あわせてから難しい。しかもサンフランシスコのような一流選手の球は速いわ、際どいわ。ラインの横幅は5センチだが、幅全体を見るか目の焦点が合わないのでライ

ジャッジ

勝負を司る人たち

(※1) ビート・サンフランシスコ(※2) リカルト・クライチエウ 時速200キロ超のサーブを武器に活躍。96年のウィンブルドン選手権で初優勝した。その外側の端だけを見ます。奥行きも(受け持つラインによれば)最長約11球も見ないといけない。僕はビントを手前から奥に合わせる方が、その逆より速いので、ビントを手前にして構える。そして今から「ボールが来る」というときに1度予習をする。ラインを(手前か)奥まで定めるように見て戻し「セツトした」という状態をつくる。それを1試合で何百回も繰り返す。尋常じゃない集中力です。だ

かわいてい・なおひろ 70年、芦屋市生まれ。神院大時代に国際審判となり、四大大会などで活躍。レフェリー最高資格ゴールドバッジ取得。現日本協会常務理事。父は国際連盟名誉副会長などを務めた故栄一氏。東京都渋谷区在住。



1990年代、サーブを軸に一時代を築いたビート・サンフランシスコは1997年7月6日、ウィンブルドン

ミリの見極め

時速200キロ、準備と集中

うぞと。人間の動体視力には限界がある。全豪オープンで以前コート下とボールが磁石を入れ、ボールがラインから何センチ離れたか計測するシステムがあった。測定が2センチ以内では「自慢で、2センチか」と迷ったけど、3センチ以上離れたら、3センチ以上なら自分で持つて見極められる分かった。ただ全豪のシステムは莫大(ぼくだ)もかれています。(判定を)

ミリ単位で下す判定の影響は計り知れない。全豪、全米など、世界最高峰の四大大会ではなおさらだ。

第4部は球技編。テニスとラグビー、バスケットボールの審判経験者に、試合進行の技術や、世界の判定基準などについて聞く。テニスは元国際審判で今も世界を舞台に活躍する川廷尚弘さん(43)に語ってもらった。

(まとめ・永見将人)

2010年2月

神戸学院大学の Social in ～地域社会とともに～



Be human before being a tennis champion!

神戸学院大学有瀬キャンパスのテニスコートには「鬼」がいる。テニス部の大西哲夫総監督は、選手も育てるが人も育てる。スポーツを通じて大切なことを教えてくれる「鬼」だ。

大西 哲夫 Tetsuo Onishi
神戸学院大学テニス部総監督

勝つことにこだわり続けた現役時代を経て

大西総監督は1971年卒業 法学部の大学OBである。現在 大学の学術情報センター事務部長を務め、その所管業務は、図書館や情報処理、教員の研究支援、国際交流など多岐にわたっている。普段は人懐こい笑顔が良く似合う大西監督だが、ひとたびラケットを握りコートに立つと、たちまち「鬼」に変身するという。歴代の学生たちは、当然のように「鬼監督」と名付けた。



1部昇格し、喜ぶ部員たち(2005年)

学生時代は「自分でもあきれくらい」にテニスに没頭し、身体を鍛え人の何倍も練習した。現役当時はとにかく「試合に勝つこと以外に考えなかった」という。そして、数々の大会で優勝の栄冠を何度も手にした。

練習の厳しさは指導者になっても変わらない。「若い頃は、俺に勝つてみる！と言って指導していました」と笑い飛ばす。しかし、その氣迫こそが創部間もない弱小だったテニス部を、現在の関西大学リーグの強豪校となるまでに育て上げたのだ。しかし、指導者となってあらためて感じることは、「勝負の本質は、その前の行動にある」ということ。それは「何事にも一生懸命に取り組む姿勢」だ。

勝負の前になすべきこと

大西監督は、「一生懸命」の基本となるのが礼儀や普段の生活態度であると考えている。だからこそ挨拶やマナーには徹底して厳しく指導する。テニス部の練習コートには「Be human before being a tennis champion! (テニスチャンピオンである前に、ひとりの人間であれ)」と書かれた横断幕が常に掲げられている。テニス部の部訓である。

競技である以上、試合に勝つことは大切だ。だからといって、人間性を捨ててまで勝つことだけを求めるのがテニスの本分ではない。テニスというスポーツが、学生の個々の能力や可能性を引き出し、人間性を育む存在であるべきと大西監督は考える。だから「一生懸命に取り組む姿勢のない学生は、たとえ実力があってもレギュラーから外すこともある」という。テニスも、学業も、「一生懸命に取り組むこと」が結果として勝利に結びつき、テニス部全体のレベルアップにつながるというのだ。

学生から「鬼」といわれながらも、学生を一人の人間として育てるその姿勢に、温かな人柄がうかがえる。「楽天」の三木谷社長も少年時代に怖さと優しさを併せ持ったこの「鬼」の指導を受けた一人である。

大学とフィリピンの友好のシンボル...『神戸学院カップ』



熱戦の様子が新聞で伝えられるなどフィリピンでも注目を浴びる「神戸学院カップ」

『神戸学院カップ』というテニスの大会がある。学内でもあまり知られていないかもしれないが、開催地は神戸でも日本でもなく、フィリピンのマニラ市だ。フィリピンは東アジア圏のテニス強国。毎年2月に開催される大会は、デビスカップ代表選手も参加するフィリピンチームと神戸学院大学テニス部の選手が出場し優勝を争う交流戦で、レベルも高い。

テニス部では1995年から毎年2月に2週間のスケジュールでフィリピンに遠征し、地元の大学チームなどと交流試合を行うのが恒例になっている。「外国の強豪選手と試合することは学生たちにとって貴重な経験です。技術面はもちろんですが、学生たちはこのテニス大会を通じて、技術以上に人間的にも多くのことを学んで帰ってきます。本当にうれしいことですよ」。いつもの人懐こい笑顔でそう話す大西哲夫テニス部総監督は、この交流試合の“生みの親”である。

こうした長年の深い交流が両者を強い絆で結び、テニス部では元フィリピン代表のデ杯選手だったノフロニオ・バラハン氏が特別技術指導員として、学生たちのコーチをつとめている。『神戸学院カップ』はいまや、ただテニスの交流試合というだけの枠を超えて神戸学院大学とフィリピンとの友好のシンボルになっている、といってもよい。

テニスを通じてつながる地域、そして世界へ。

大西監督は、兵庫県テニス協会理事長や日本テニス協会評議員など多くの要職を兼務している。しかし、立場や肩書きは異なってもテニスに託す想いは一つだ。「テニスを楽しみ、テニスに学ぶことは何も実力のある選手だけの特権ではありません。テニスや、テニス部を通じて世の中の役に立てるようなことを企画し進めて行きたいと思っています」。テニスへの情熱は尽きることがない。



たとえば、NPO法人を通じて始まった「阪神間聴力障害者テニススクール レッドベレーズ」での指導はもう17年を数え、いままなおテニス部のOBたちが指導を続けている。

また、スポーツを通じた地域との連携行事の一環として、大西監督はプログラム・ディレクターとして「神戸学院大学ジュニアテニス強化プロジェクト」を新たに立ち上げた。「次代を担うジュニア選手の育成、強化」を目的とした年間20回のテ

ニススクールで、テニス部のコーチや学生、OBらがアシスタントコーチを務める。「コーチ役の学生も真剣に教えることで逆に多くを学んでいることに大きな意義がある」という。

そして、もちろんジュニアに対しても大西監督の指導は変わらない。「まずは、大きな声で挨拶する習慣からです。そして、ご両親など周囲の方々への感謝の気持ちを忘れないこと。テニスはそれからです」と話す。

このプログラムは、地元をはじめ県外からも数多くの応募があり好評を博している。早期練習にもかかわらず、遠くは滋賀県や淡路島からの参加者もいる。参加者は、ただ「勝つ」だけにとられない テニスの面白さを教えてくれる大西監督の指導を慕う子どもや保護者たちである。

有瀬キャンパスのテニスコートでラケットを振る大勢の子どもたちの姿は、いまでは日曜日の早朝の風景だ。全日本ジュニアの選手をはじめ、子どもたちはみんな一生懸命にボールを追いかけている。このジュニアテニススクールから、全日本を代表する選手が生まれる日はそう遠くなくさそうだ。そんな話をしている大西監督はいかにも楽し気である。

テニスを通じ、勝負にこだわりつとも人を育て 地域との連携や国際交流にも携わる。そして、事務部長としての職責に多忙を極める大西監督。大好きな山登りにはまだ当分行けそうにないと愚痴もこぼすが、「学生や子どもたちの成長する姿に支えられています。これからまだまだがんばりますよ」と語る表情は 学生にも負けない若々しい気迫に満ち溢れていた。



子どもたちはジュニアテニススクールで 技術はもとより マナーや感謝の気持ちなど多くのことを学んだようだ。このなかから、全日本を代表する選手が誕生するかもしれない。

プロフィール

- 1971年3月神戸学院大学法学部卒業。同年9月に同大学事務職員として着任と同時にテニス部監督に就任。学術情報センター事務部長。
1977年から2005年まで地域民間テニスクラブでジュニアテニスの指導にも携わり、全日本ジュニア選手らを輩出。2005年、兵庫県テニス協会理事長、関西テニス協会常任理事 日本テニス協会評議員に就任。同年行われた岡山国体と2006年兵庫国体では、テニス競技兵庫県総監督として2年連続総合優勝を果たす。このほか 1985年から神戸市、関西テニス協会、兵庫県テニス協会のジュニア海外遠征 ラトビア共和国、上海 フィリピン の団長 監督を務める。文部科学省認定スポーツA級指導員。

■神戸学院大学テニス部の詳細はこちら >>

▲ページトップ



Human Story

2部から1部へ昇格するまで27年。 ようやくやく一つ責任を果たせたかな。

テニス部総監督 大西哲夫さん
(九七年法学部卒業)

PROFILE

1945年加古川市生まれ。
神戸学院大学学生部次長。
神戸学院大学テニス部総監督。
兵庫県テニス協会理事長。
関西テニス協会常務理事。
日本テニス協会評議員。



27年間の悲願を達成

— 1部リーグ昇格おめでとうございます。

昭和41年にテニス部ができて 翌年われわれが硬式テニス部を立ち上げました。当時関西学生テニス連盟は7部制で 47年に7部で優勝して6部に昇格した。僕が監督になって2年目です。それからは4年連続昇格して3部まで駆け上がり その2年後に2部へ。そこまでは順調でしたが、そこからが大変でした。

創部当時はみんな天井に「打倒、関学 甲南」と書いて 毎晩それを見ながら寝たものです。創部してから40年してやっと念願の1部リーグ昇格を実現しました。たくさんのOBの顔が走馬灯のように浮かんできます。 つの義務を果たせたかなという感じですが。

— 監督になられたのは、卒業してすぐ？

昭和46年です。家が建材店をやっていて跡取りなので 本当は継がないといけない。ところが、学生時代にテニスにはまってしまった。跡継ぎを意識して就職したけど 7月の合宿が始まるとムズムズしてきて辞めた。テニスをしたかったし クラブの面倒を見たか

I am,

私の場所は、このキャンパスにある。
Kobe Gakuin University



選

手時代は「試合に勝

つことしか考えなかつたと話すのは、神戸学院大学テニス部の大西哲夫総監督。1966年の創部

当初から現在の関西大学リーグの強豪校となるまでに育て上げたのが大西監督だ。普段は大学職員として学術情報センター事務部長を務める。神戸学院大学OBでもある。

人懐こい笑顔がよく似合う大西監督だが、一たびラケットを握りコートに立つと「鬼」に変わる。「楽天」の三木谷社長も少年時代にこの「鬼」の指導を受けた一人。人一倍の練習はもちろんだが、挨拶とマナーにはとくに厳格で徹底している。

テニス部の練習コートには「Be human before being a tennis champion」(テニスチャンピオンである前に、一人の人間であれ)と書かれた横断幕が常に掲げられている。勝つことにこだわった選手時代。しかし、指導者となり「勝負の本質は、その前の行動にある」ことをあらためて感じる。それは「何事にも一生懸命に取り組む姿勢」だ。その基本が礼儀であり生活態度。ゆえに「たとえ実力があっても一生懸命さのない学生はレギュラーから外すこともある」と大西監督。「鬼」といわれながらも、学生を一

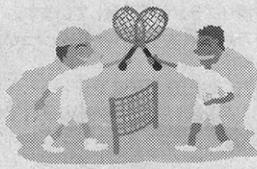
人の人間として育てるその姿に温かな人柄がうかがえる。

現在、大西監督は兵庫県テニス協会理事長などの要職を兼務しながら、スポーツを通じた地域との連携にも力を入れる。「神戸学院大学ジュニアテニス強化プロジェクト」はそのひとつ。年間20回のスクールで、テニス部のコーチ、学生、OBがアシスタントを務める。

目的は小・中・高校生らジュニア選手の育成や強化だが、ここでも大西監督の指導は変わらない。「まずは大きな声で挨拶すること。そして周りへの感謝の気持ちをお忘れなさい。テニスはそれからです」。

このプロジェクトには毎年、地元のほか県外からの参加者も少なくない。テニスの面白さや人として大切なことを教えてくれる、大西監督を慕う人たちである。

勝負にこだわらなくても、人を育て、地域とのつながりも大切にしたいと願う大西監督。その身がいくつあっても足りそうにないが、「学生や子どもたちの成長する姿に支えられています。これからは頑張りますよ」と語る表情は気迫に満ちあふれていた。



Be human before being a tennis champion!

さらに詳しい内容は大学ホームページ(學報.net)でご覧になれます
→<http://www.kobegakuin.ac.jp/gakuho-net/>



神戸学院大学

<http://www.kobegakuin.ac.jp/>

●TEL: 078-974-1551 (代表)

■有瀬キャンパス ■ポートアイランドキャンパス ■長田キャンパス (法科大学院)
| 法学部 | 経済学部 | 経営学部 | 人文学部 | 総合リハビリテーション学部 | 栄養学部 | 薬学部 |



神戸学院大学 体育会テニス部のあゆみ

- ① 1966年 テニス部創設 顧問 佐野保雄先生 初代主将 藤田照美氏
- ② 1967年 関西学生テニス連盟加盟（7部校）1～6部4校制
- ③ 1970年 テニス部コーチ 木村逞二氏 田中忠夫氏 就任
- ④ 1971年 OB会発足 初代OB会長 加藤幸男氏 就任 初代監督 大西哲夫氏 就任
- ⑤ 1972年 **7部優勝 6部昇格 入替戦** 京織大（7部校 関外大、追大、大工大）
- ⑥ 1973年 **6部優勝 5部昇格 入替戦** 姫工大（6部校 大院大、大体大、京教大） 2代目OB会長 野垣滋氏 就任
- ⑦ 1974年 **5部優勝 4部昇格 入替戦** 大府大（5部校 大教大、神外大、京府大）
- ⑧ 1975年 **4部優勝 3部昇格 入替戦** 立命大（4部校 大外大、和太、桃大）
- ⑨ 1976年 **3部優勝 入替戦敗退** 京大（3部校 神商大、大市大、大経大）
- ⑩ 1978年 **3部優勝 2部昇格 入替戦** 京大（3部校 大市大、大教大、立命大）
- ⑪ 1982年 佐野保夫顧問退職 名誉顧問に就任 OB会第1号特別会員 83年4月逝去）
- ⑫ 1985年 2代目監督尾上佳光氏 就任（3年間） 総監督 大西哲夫氏 就任OB会特別会員 木村逞二氏 田中忠夫氏 渡辺久雄氏に就任
- ⑬ 1987年 **3部降格 入替戦** 神大（2部校 近大、大経大、甲南大）
- ⑭ 1988年 **3部優勝 2部昇格 入替戦** 大経大（3部校 大市大、立命大、関大）
3代目OB会長 岡崎専一氏 会長就任 尾上佳光氏監督退任 大西哲夫氏総監督が兼務
- ⑮ 1989年 **3部降格 入替戦** 大経大（2部校 近大、京産大、神大）
女子6部優勝 5部昇格 入替戦 大市大（6部校 大院大、夙川短大、追大、関大、仏大、神院短大）
- ⑯ 1990年 第5グラウンドに砂入り人工芝テニスコート5面 完成 中嶋謹成氏技術指導員に就任（3年間）
- ⑰ 1991年 **4部降格 入替戦** 阪大（3部校 立命大、京大、関大） 大学内クレイコート5面 ナイター完成
- ⑱ 1992年 関西学生テニス連盟編成替（1部5校制 男子部3部女子4部） 法学部にスポーツ選抜入試導入（テニス部対象クラブに選ばれる）
テニス部創部 25周年記念式典開催（於：大学9号館ハーフタイム） テニス部創部 25周年記念誌発行「望淡」
テクソン臨時コーチに就任（4年間） 川廷尚弘（4年） 学長賞受賞
- ⑲ 1994年 **女子4部優勝 3部昇格 入替戦** 成蹊女短大（4部校 甲南女大、甲南大、神院短大、大教大、関学大）
2代目顧問久富玄理氏 就任 レッドベレーズ（関西聴力障害者テニスサークル） 月1回部員2名派遣
- ⑳ 1995年 **3部優勝 2部昇格** 優勝校自動昇格（3部校 阪大、大府大、神大、桃大、大経大）
阪神淡路大震災の復興ボランティアに参加 寺田敏明氏副部長に就任 第1回フィリピン遠征開始（監督 選手6名）

- ⑳ 1998年 石岡慎太郎氏 女子部コーチ就任
- ㉑ 1999年 OB山本弘治氏レッドベレーズチーフコーチに就任 大学会館竣工
- ㉒ 2000年 テニス部ホームページ開設 山中夏雄氏技術指導員に就任（2年間）川上晃司氏トレーニングコーチに就任（10年間）
- ㉓ 2001年 経済学部（経営学科含む）スポーツ指定校にテニス部が選ばれる
- ㉔ 2002年 テニス部準強化クラブに指定される パラハン特別技術指導員就任
第5グラウンドテニスコート5面をハードコートに改修 テニス部創部35周年 OB 会創立35周年記念誌発行OB会部旗寄贈
- ㉕ 2004年 **2部優勝 1部入替戦** 大体大に敗退（2部校 甲南大、関外大、大院大、龍大、京大）橋本雅代氏女子コーチ就任
- ㉖ 2005年 **2部優勝 1部昇格 入替戦** 同大に勝利（2部校 甲南大、関外大、大院大、神大、関大）テニス部強化クラブに指定される
- ㉗ 2006年 **1部3位 神戸学院大学ジュニアテニス教室開校** 法学部 経済学部 経営学部の実技を伴うスポーツ選抜入試を導入
- ㉘ 2007年 **1部3位** 小川冬樹（4年）関西学生テニス選手権 春・夏シングルス優勝 齊藤氏寛氏副部長に就任（8年間）
人文学部に実技が伴うスポーツ選抜入試を導入
- ㉙ 2008年 **女子部 3部優勝 2部昇格 入替戦** びわこ成蹊大学（3部校 京産大、甲南女大、大国大、神大、阪大）
- ㉚ 2009年 **2部降格 1部入替戦** 関大に敗退（1部校 近大、同大、関学大、立命大、大体大）
中西未希子（4年）関西学生テニス選手権 春ダブルス優勝 学長賞受賞
- ㉛ 2010年 **2部優勝 1部昇格 入替戦** 立命大に勝利（2部校 びわこ成蹊大、大院大、京産大、関外大、甲南大）
横山正吾氏トレーニングコーチに就任
- ㉜ 2011年 **1部6位 1部残留 入替戦** 立命大に勝利 大西哲夫総監督リーグ戦終了後定年で 監督を退任（41年間）
ジュニアテニス教室ディレクターに就任 パラハン特別技術指導員が3代目監督就任 石岡監督補佐が技術指導員に就任
大田翼氏副部長に就任（4年間）**神戸学院大学テニスクラブ発足**（明石市テニス協会に加盟登録）
- ㉝ 2012年 **1部5位 1部残留 入替戦** 立命大に勝利 強化クラブ復活
- ㉞ 2013年 **1部6位 2部降格 1部入替戦** 立命大に敗退（1部校 関大、関学大、近大、同大、甲南大）女子 4部降格
神戸学院大学ジュニアテニスクラブ 1期生 越智真（全日本ジュニア男子シングルス18歳以下優勝 JOC全日本
選抜室内ジュニア男子シングルス優勝）テニス部 50周年記念式典実行委員会発足
- ㉟ 2014年 大学は10年を区切りに強化クラブ等見直し作業に入る
- ㊱ 2015年 **2部優勝 1部昇格 入替戦** 立命大に勝利（2部校 龍大、大教大、桃大、大体大、大院大）
9月テニス部強化クラブBに降格 曾田光紀氏 栗原育美氏副部長に就任
- ㊲ 2016年 **1部4位**（1部校 関大、近大、同大、甲南大、関学大）第5グラウンドテニスコート補修 改修
神戸学院大学テニス部創部50周年記念式典開催 於：神戸学院大学ポートアイランドキャンパス（11月19日）